

「総合的な学習の時間」における学び方の学習

「総合的な学習の時間では学び方を学ぶ」という考え方があります。今回はこれについて考えてみましょう。

このような考え方が出てくる背景には、日本の学力特性の問題があると思います。様々な学力の国際比較研究において、日本の子どもは基本的な知識・技能においてはトップレベルにあるが、思考や応用を求められる問題や学習意欲などに関してはほめられない状況にある、という結果が出ています。このような結果を見れば、うまくいっている知識・技能は現状を維持しながら、思考や学習意欲などを改善したいと考えるのは当然でしょう。

それをどう実現するかが問題なのですが、うまくいっている部分には手をつけず、改善したい部分には別途対処する、というのも一つの方法です。そこで、教科教育は内容を厳選するだけでこのまま維持し、考え方や学び方を学ぶために「総合的な学習の時間」を使うという考えが出てきます。そこでは、自分自身でテーマを決めて学習を進めていくことを通して、学び方を身につけることができるわけです。

私自身の立場から言わせてもらえば、この考え方はどう考えても変です。そもそも、教科では考え方や学び方を教え（られ）ないという考え方が納得いきません。教科こそが、考え方や学び方を教える場であるはずですが。また、教科、道徳、特別活動の3領域に加えて「総合的な学習の時間」を設けるという考え方は、教えたい内容に合わせて別々の領域を立てるということであって、決して「総合的」なアプローチではないですね。

しかし、現状を考えれば、ある程度の妥協はせざるを得ません。従来の教科の授業の中で考え方や学び方を教えてきたと言っても、その時間が十分でなかったのは事実でしょう。何しろ、決められた授業時間の中で、決められた内容を終了しなければならないのです。取り上げれば面白い展開になりそうな意見も、簡単に流してしまわなければなりません。調べてみたら面白そうな問題が提起されても、口頭で説明して終わりにしなければなりません。とにかく、時間が無いのです。

このように、限られた時間内で決められた目標を達成するためには、何らかの形で効率化が必要になります。この目標が「習得すべき知識・技能」だと誤解されているため、授業は教師があらかじめ決めておいた道筋をたどるという方向へ効率化していかざるを得ません。さらに、それを確実なものとするため、必要になりそうなものはすべて教師が事前に用意しておくことになります。すべてがお膳立てされている状況で学習しても、考え方や学び方が身につかな

いのは当然ではないでしょうか。

教科の時間にゆとりを持たせたとき、このような状況は改善されるのでしょうか。そうかもしれないし、そうでないかもしれません。これは個々の教師の学習観や力量によって変わってくるでしょう。それなら、全国一律に教科とは別の時間を設けて、そこでは教科の授業のような効率を追求しない学習を行なうことにする、というのでもいいかもしれません。

こう考えると、「総合的な学習の時間」での学習は、横断的であったりテーマ学習であったりする必要はなくなります。教科の授業の中で取り上げられなかった自分の意見、もっと知りたかったのに時間切れで終わってしまった話題、自分で実験して調べたかった問題など、時間さえあれば追求したかったことを追求できる時間だと考えてもいいのです。「総合的な学習の時間」なんだから何か特別なことをしなければ、と考える必要はないのです。

「総合的な学習の時間」実施計画の問題点

「総合的な学習の時間」が来年度から段階的に導入されるということになり、そろそろ各学校で実施計画が立てられていると思います。今回はその実施計画の持つ問題点について考えてみたいと思います。

「総合的な学習の時間」は学校単位で実施ということになりますから、どの学校でもかなり力が入った計画が立てられていると思います。しかも、学校の教育計画にはパターンがありますから、それに当てはめたような計画になっていることでしょう。「総合的な学習の時間」の場合、おそらくどの学校でも、「生きる力」「学校目標」「総合的な学習の時間の目標」という流れを縦軸にした図が描かれているのではないのでしょうか。その両脇には、「子どもの実態」や「地域の特色」などが配置されているはずです。(研究指定校の研究計画は、それがどんな研究テーマであってもだいたいこのパターンになってますね。)

私が危惧しているのは、このような計画を立ててしまうことです。これによって、「総合的な学習の時間」の学習もまた、従来の教科学習と同じになってしまうのではないのでしょうか。ここでは、2つの問題について考えて見ましょう。

第1の問題は、容易に見てとれるように、この手の計画が結局は教師主導だということです。「総合的な学習の時間」で何をするのかという大枠を作るところには、学習者は参加できません。学習者にできることは、教師の決めた「総合的な学習の時間」の枠の中で自分が何をするか、ということです。この構造は、従来の教科学習と何の変わりもありません。

学習者自身が参加して「総合的な学習の時間」の計画を作ったのであれば、何年か後になってその時点での学習者が「総合的な学習の時間」の計画を自分たちに合わせて作り直すことも可能でしょう。こういう自分たちの学習活動の枠組み自体を考え、作っていくことこそが、「総合的な学習の時間」の狙いではないでしょうか。そして、こういう学習経験を持つことによって、学習者自身が教科学習の枠組みをも変えていくことが目指されているのだ、と考えられないでしょうか。

このように主張すれば、「そこまで学習者に任せてしまうと失敗するのではないか」、「やはりある程度の枠は教師が作らなければならないのではないか」と心配されることは予想できます。もちろん、学習者に任せてしまえといっているわけではありません。「そもそも何をどう学びたいのか」という前提自体について、教師と学習者がもっと話し合ってもいいのではないかと、そのこと自体がいままで欠けていた学習ではないかと主張しているのです。

それに、学校の特徴の一つとして、「学校は失敗してもいいところである」という点がよく挙げられます。しかし現実には、失敗しないように教師によっていろいろなことが先取りされています。「総合的な学習の時間」では、教師が先取りをせず、常にその場その場で教師と学習者で話し合って決めていくということも重要ではないでしょうか。

さて、第2の問題は、この手の計画が基本的に教師の負担を増やすということです。『「総合的な学習の時間」における学び方の学習』で述べたように、現在の教育問題の一因は、教師あるいは授業に余裕がないことだと思います。だとすれば、「総合的な学習の時間」によって負担が増え、授業の準備が不十分になったり授業が駆け足になってしまったのでは、まったく意味がないことになります。

「総合的な学習の時間」があるので普段の授業が余裕をもってできるようになった、教科の中でできなかったことが「総合的な学習の時間」を使ってできるようになった、という状態になることが望ましいのではないのでしょうか。そう考えれば、きちんとした計画を立て、全校一丸となって「総合的な学習の時間」を実施していくというやり方は、これまで以上に教師の余裕を奪っていくことになり、よりよい教育を目指すという点から見れば逆効果になりはしないのでしょうか。